北海道医歌人会詠草

抹香鯨（マッコウ）

札幌　山口　康徳

南国に打上げられし抹香鯨（マッコウ）の巨大にすぎて人ら手出せず
刻々と地温昇れどうそぶきてわれ関せずと席つかぬ国
わが国の北端にある知床も地球ゆみれば流氷南限
日を追ひて陸海空の事故多しその源は過労にありや
自らの国に住めども許されず頻々起るテロの暴発

回顧

札幌　古屋　統

「石綿」の宝来先生瀬良先生学会員名簿に既に名を見ず
業界は胸・腹膜中皮腫を報じたる近畿中央病院を深く恨むと
労働者保護の規制の強化案通産の壁をまたも崩せず
「粉塵」の定義突嗟に出ぬ死角通産の若手が切込んで来る（実務者レベル協議）
通産の壁の固さに憮然たる労働安全衛生部の若手技官ら

戴帽式

美唄　吉村　誠治

皆若き八十名の学生の白きキャップがキャンドルに映ゆ
キャンドルを捧げ静かに歩みくる白衣の顔に思ひ漲る
戴帽式終えたる今日の教室は学ぶ眼（マナコ）に力ありたり
戴帽式この感激を保つべしキャップ廃止を云ふ声あれど
実習にキャップ被らず来たるには抵抗感あり我は旧くして

大学の北

札幌　小国　孝徳

熱中症を怖れて入り来し楡の杜ポプラの綿毛限りなく飛ぶ
芋誠司教授の室は何処なりし資料館に変れる理学部めぐる
倒れたるポプラにて作りしフルートの優しき音色は余韻嫋嫋
大学病院前に並べる薬局五六軒分業となるまで見られざりにき
大学の南に生まれて北に終る一生か楡の杜の上の月

卒五十回

帯広　中野　知弘

同期会、卒五十回の案内状　夢にはあらずこの五十年
目覚めぬて真夜に回（めぐ）らす五十年ただ積み来たる一年（ひととせ）ばかり
行くものはかくの如きとのたまへば昼夜をおかず着きたるところ
余命あと幾年ばかり計れども何ぞ知らむや神ならぬ身に
名儀もち手足つけたる白衣かな今朝も出でゆくゴースト吾は

河骨の花

札幌　魚住あらた

花は終へみどりをしゐましつと想ふ逝きたるこゝろ河骨の花
事ごとにつくづくたりきけふの花庭石の花亡き人想ふ
ほろほろと八日の花河骨の花が咲きゐて火のにほひする
いち脈のなきあるこゝろ想ふつくづくたりきにほはずの花
花終へしみどりをしゐま物の根に逝きたるこゝろつくづくたりき